

選考にあたって

「勇気ある経営大賞」選考委員長
国際大学 学長

伊丹 敬之



「勇気ある経営大賞」の今年の最終審査を終えて、二つの大きな印象が残った。

一つは、社会性の高い(別な言葉でいえば、社会的にインパクトが高い)事業で優れた成果をあげたと思われる受賞企業がかなりあった、ということである。もう一つの印象は、リーマンショックが与えた傷の深さから立ち直りがやっとできたという企業が、受賞企業にもあるいは奨励賞受賞に回らざるを得なかった企業にもかなりあった。リーマンショックからほぼ10年。それだけの時間がかかるのか、という感慨もあった。

社会性の高い事業のいい例が、大賞の丸高工業と優秀賞の協栄産業である。前者は耐震補強工事を中心に、工事全体に必要なさまざまな作業を徹底的に分析して、比較的熟練度の低い人たちでも作業ができるように作業工程やマニュアルを工夫し、また器具も導入している。結果として、工数の削減による労働時間削減、柔軟な人員配置、などを実現した。これは、同社のみならず、建設業に大きなインパクトがある事業成果である。

協栄産業は、ペットボトルの完全リサイクル(ボトルを回収し、ボトルになりうる素材に再生する)に成功している。環境問題を解く鍵の一つである静脈産業(廃棄物などの回収から始まる事業)でのめざましい成功例であろう。

いずれの企業も、困難な挑戦をあえて行い、その成功までにさまざまなリスクを経験し、最後には障壁を乗り

越えた。まことに、勇気ある経営そのもので、この大賞にふさわしい企業である。

リーマンショックからの回復には10年の歳月が必要なのか、という思いを新たにさせてくれたのが、南武と協進印刷である。業種は、特殊なシリンダーの製造と印刷・パッケージングとそれぞれまったく異なるのだが、リーマンショック後の大きな売上ダウンからリカバリーするために、新天地を求めて勇気ある経営を行なった。南武の場合は中国進出であり、協進印刷の場合は医薬品用パッケージング分野への進出だが、いずれもその進出を成功させて、リーマンショック前の業績に戻っている。二社の10年にわたるご苦勞に、大いに敬意を表したい。

特別賞受賞のワキュウトレーディングは、マッシュルーム専門商社である。日本であまり食習慣のなかった白い小さなマッシュルームを広めるために、じつにユニークで多様な努力を社長自身が重ねてこられた。好きこそもの上手なれ、というが、マッシュルームに賭けた人生と企業は、特別賞にまことにふさわしい。

今年も、例年のようにユニークな受賞企業に恵まれた。感慨の深い審査でもあった。そして、例年のことだが、選考のための現場調査などをご担当頂いたワーキンググループの委員の方々には、夏の暑い盛りに作業をしていただいた。さらに、惜しくも三次選考にもれた多くの企業の方々にも調査をご協力頂いた。みなさんのご努力に、心から感謝したい。